

戦跡を歩く14

6月23日
慰霊の日
特集

太平洋戦争終結から75年を迎え、戦争体験者が少なくなるなか、戦争の記憶をいかに引き継ぐかが課題となっています。シリーズ14回目の今回は、フィリピンで戦争を体験し、沖縄引揚げ当時数え11歳だった字新垣の男性の証言を紹介します。戦前多くの沖縄県出身者がフィリピンに移住し、現地で戦争体験をしました。市が行った調査によると糸満市出身者1,100余名がフィリピンで戦争を体験しています。

ミンダナオ島はフィリピンで2番目に大きい島です。戦前糸満市から農業従事者を目的に多くの人がこの島に移住しました。宜野座さんのご両親もミンダナオ島にて麻栽培を行っていました。

戦争は被害だけで何も残らない
～宜野座嗣郎さんの戦争体験～

フィリピンで生まれて

両親はフィリピン・ミンダナオ島の田舎、ディゴースという町からさらに田舎のほうで麻山を営営していました。

私は、1943(昭和18)年ディゴース国民学校に入學しました。学校では五十音図と掛け算九九の暗記をさせられたんですが、勉強面は二の次で、防空訓練あるいは避難訓練を毎日のようにやりました。

避難の始まり

1944(昭和19)年10月、登校中に米軍の飛行機による空襲がありました。集団登校の最中で、6年生が「友軍の飛行機じゃない、隠れる!」とすぐに指示を出しました。しばらく麻山の中に隠れていて、「これじゃだめだから帰れ!」と

また指示を受けて、それぞれ自宅に帰ったんです。

防空壕が自宅そばに作られていて、一日中防空壕の中にいました。父親は飛行場に動員されていて、そこから必死に帰ってきました。

空襲から一日経ち、ディゴースからかなり遠いタモガンに行けという指示が出され、避難が始まりました。

アポ山での避難

避難民も日本軍も一緒になってタモガンを目指したんです。一週間か10日ぐらい経ったらタモガンが爆撃されて大被害を受けたとの情報があり、私たちは方向転換して、フィリピン一高いアポ山に避難しました。兵隊が引率していたと思うんですが、避難はゆつくりゆつくりで、今日は麻山の中、次の日も麻山の中、

その次の日はジャングルの中という具合でした。

避難は、食べ物を持って歩くことは無理でしたが、自然の中にタロイモとかパイヤとかバナナとか野生のものがあつたので、食べ物には不自由しませんでした。けれども、塩といった調味料がないことには困りました。

密林の中に入ってしまったら、米軍の飛行機から見えずに爆撃を受けることはなかったけれど、風土病やマラリアで目の前で元気な人が何人も亡くなりました。薬も無いから、元氣そうなお子どもが高熱を出してコロリと亡くなっていくのが怖かったですね。兵隊で体力がある人でさえ、風土病にかかったらもうダメで、亡くなったらその場で埋葬するしかありませんでした。私たち家族は、マラリアや風土病にかからずにすんだのは幸運でした。

米軍の偵察機がまいたビ

ラで、日本の敗戦を知り、何日かして山を下りました。

家族との別れ

山を下りて大きな道に出ると、米軍のトラックがたくさん並んでいました。米兵が成人の男と、女・子どもを別々にするんです。私たちきょうだいは母親と一緒に、父親とは別々になりました。この時以来父親とは生き別れとなりました。

収容所で2カ月過ごし、米軍の貨物船に乗せられ、広島の大に引き揚げて、広島から福岡の欽修寮(きんしゅうりょう)という所に収容されました。欽修寮では沖縄の人が何

百人も暮らし、食べ物も与えられました。生活は楽になったんですが、悪性マラリアにかかっていた母親はそこで亡くなってしまっ

て、母親の死からすぐ、母親の母乳を貰えなくなった一番下の妹も亡くなりました。

欽修寮で1年近く過ごし、1946(昭和21)年11月沖縄に引き揚げてきました。港からはトラックに乗せられて、字新垣の今のバス停留所、共同井戸の所できょうだい5人がトラックから降ろされました。すると、村の人たちがたくさん集まってきて「よかったね、

よかったね」って拍手して笑顔で迎えてくれました。

沖縄での生活

帰ってきた時は11歳だったんですけど、教育の空白がありすぎて3年生から勉強をやり直しました。

当時は、沖縄戦で亡くなった方々の遺骨収集も終わっておらず、遺骨収集は区長さんが音頭を取って、村をあげて収集して、自然の壕に仮安置をしていました。

戦争で残ったもの

父親は浦賀に引き揚げた後、浦賀で亡くなり、同じ字新垣出身の金城亀蔵さん

の世話で、火葬され沖縄に遺骨が帰ってきました。父親も母親も一番下の妹も故郷の地を踏むことなく、遺骨として帰ってきました。

私は戦争で3つの被害を受けるという経験をしました。家族をなくした被害、

父親がフィリピンで築いた財産を全部失ったという被害、同年生とは2年遅れで学校を卒業せざるをえなかった教育の被害です。

残っているものというものは何もありませんね。精神的な財産みたいなものが何も残らないという、そういう状況になってしまいました。

宜野座 嗣郎さん

フィリピンに移住した両親の下1936(昭和11)年ミンダナオ島のディゴースで生まれました。戦中はミンダナオ島のアポ山の山中を家族と避難。引揚げ後の日本で父と母、妹を亡くし、きょうだい5人で沖縄に戻る。高等学校の国語教諭を経て県立高校の校長職を歴任



戦跡紹介



ソージガー

集落前方、県道250号線沿いにあり、イリーガー(西井泉)ともいい、飲料水や生活用水として利用された。沖縄戦当時は水を汲みに来た人が、近くで命を落とすことも多かったという。終戦直後、引揚者を乗せたトラックはこの近くで新垣出身者を降ろした。トラックが到着すると多くの住民が集まり、引揚者との再会の場となった。



平和祈念之碑

1950年代初めに現在の新垣公園の南側に字新垣愛郷会によって建立された。367名の合祀者が祀られているが碑文はない。1997年に新垣公園を整備するさい、現在の広場北側の高台に移設された。

沖縄戦における糸満市の情報は「糸満市史 資料編7 戦時資料上巻」「同下巻」で紹介しています。

問い合わせ 生涯学習課
☎ 840・8163